

一 遺跡の位置と環境

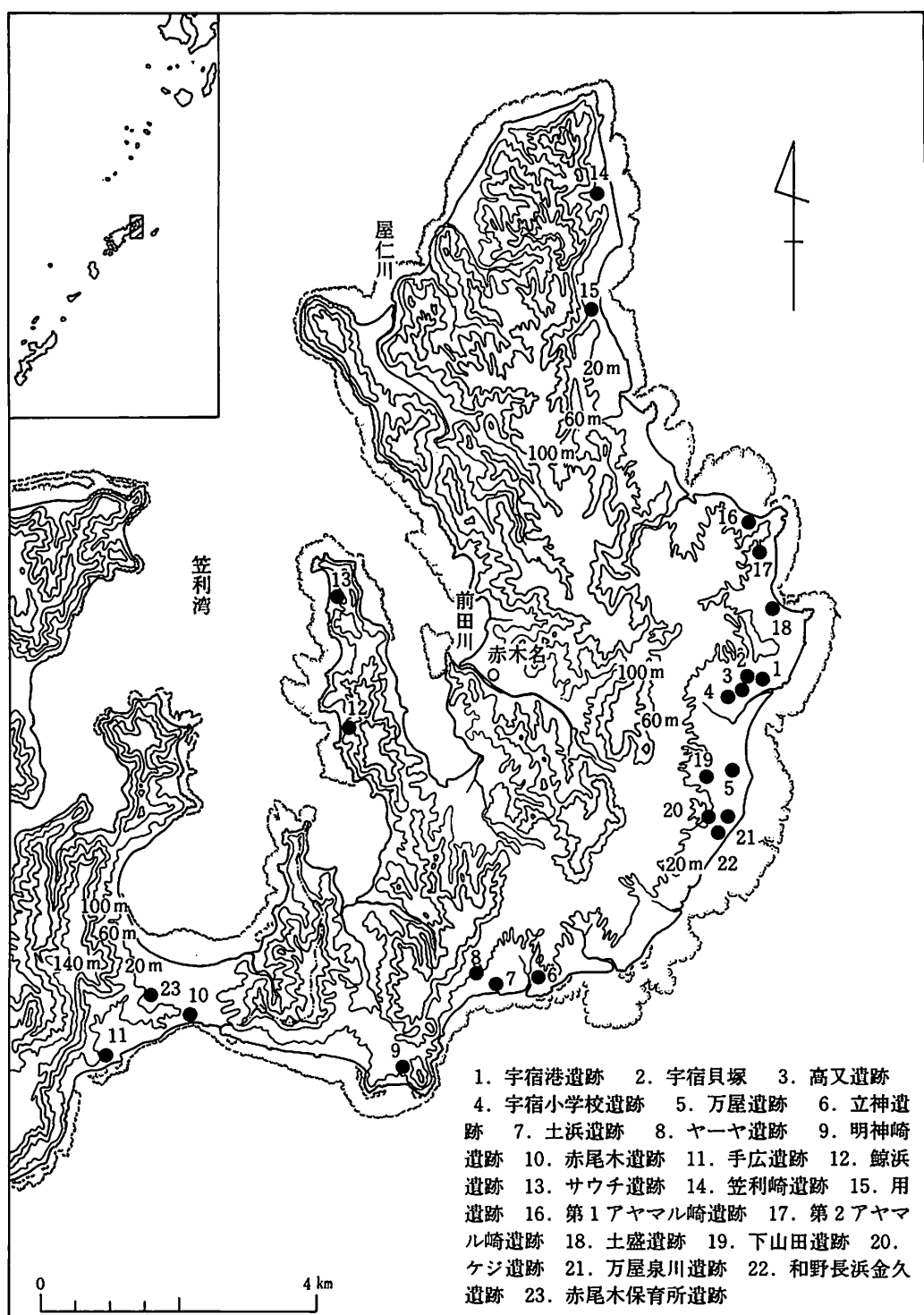
宇宿港遺跡は、大島郡笠利町宇宿字港にある。

奄美大島は300～400mの山陵をもち、奄美諸島のなかでも特に険しい地形をなしている。海岸線は出入が多く、しかも山裾が急傾斜をなして直接海に没している。これに対し、港遺跡の立地する笠利半島は全体に地形が緩やかで、低い台地を形成し、高嶽・淀山・大刈山の三山が脊梁として半島を東西に分けているが、その高さは200m足らずである。

西側の笠利湾にのぞむ地域は海岸の屈曲が激しく、丘陵が海岸にせまり、大島特有の地形をなしている。遺跡の分布は少なく、サウチ遺跡と鯨浜遺跡が知られているにすぎない。サウチ遺跡は、笠利半島から更に分岐した小半島の先端近くの砂丘上に営まれた遺跡で、生活址や埋葬址が発見されている。また、紡錘車、磨製石鏃など、弥生^{註1}の文化的要素を帯びた遺物も出土し、広田遺跡と同類の貝符も採集されている。

半島の東側は全体として、標高10～60mの海岸段丘がひろがるなだらかな地形をなしている。海岸は、大島の他の地域に比べて単調で出入が少ない。砂丘や珊瑚礁の発達が著しく、遺跡の数が際立って多い（第1図）。崖下の狭隘な地点に立地した用遺跡、海岸砂丘上にひろがる万屋遺跡や明神崎遺跡などからは、平底の底部に木葉の圧痕を有する兼久式土器が出土している。万屋遺跡の県道を挟んだ向い側の下山田遺跡^{註2}では、採砂によって包含層が露出し、いわゆる面縄前庭式や条痕文を施した土器片が採集されている。土盛遺跡においては、貝匙の未製品や龍泉窯の青磁片が、また、アヤマル第1遺跡からは須玖式の甕形土器の口縁部が採集されている。ヤーヤ遺跡は笠利町唯一の洞窟遺跡で、奄美で初めてヤブチ式土器が発見され、大形の貝輪や貝符が採集された。^{註4}手広遺跡は顕著な累層遺跡で、いわゆる兼久式土器から面縄西洞式の土器に至る6枚の文化層が確認されている。^{註5}

宇宿港遺跡のある宇宿地区では、宇宿貝塚、宇宿小学校遺跡、高又遺跡などが存在し、密度の高い遺跡地帯を形成している。特に宇宿貝塚は戦前から知られ、九学会の調査により宇宿下層式と市来式の共伴が確認され、昭和53年の調査では、生活址や埋葬址などが発見された。^{註6}高又遺跡においては、曾畑系土器とヤブチ式土器が出土して^{註7}



第1図 宇宿港遺跡位置図

註8
いる。

宇宿貝塚と宇宿小学校遺跡は高又川を挟んで南北に対峙する砂丘の上に形成され、高又遺跡は一段低い両者の中間地点に占地している。往時はこのあたりまで海が湾入していたと思われ、宇宿港遺跡はその湾口の北側の砂丘に形成されたものである。宇宿貝塚と当遺跡を繋ぐ位置にある宇宿保育所建設の際、人骨や多くの土器片が出土したことから見てもこれらが一連の遺跡であったことは明らかである。(第2図;図版I)。よって当遺跡は小字名の上に総称としての大字名をつけ、宇宿港遺跡とした。当時この一帯は水深の極く浅い珊瑚礁・巾着なりの湾・鹹水と汽水・砂丘の後背湿地・その更に後の広大な台地などをひかえたすぐれた生活適地だったのであろう。なお、当遺跡の文献上の初見は、三宅宗悦氏『南島の旅』の「戦浜」の人骨出土地点であるらしい。
註9
い。

(谷口)

註1. 河口貞徳・出口浩・本田道輝 「サウチ遺跡」 『鹿児島考古』12 1978

註2. 河口貞徳 「奄美における土器文化の編年について」 『鹿児島考古』9 1974

註3. 註2と同じ

註4. 永井昌文・三島格 「奄美大島土浜ヤーヤ洞窟遺跡調査概報」 『考古学雑誌』 第50巻第2号 1964

註5. 竜郷町教育委員会 「手広遺跡発掘終了報告」 1979

註6. 九学会連合奄美大島共同調査委員会編 「奄美—自然と文化」論文編 19 59

註7. 笠利町教育委員会 「宇宿貝塚」 1979

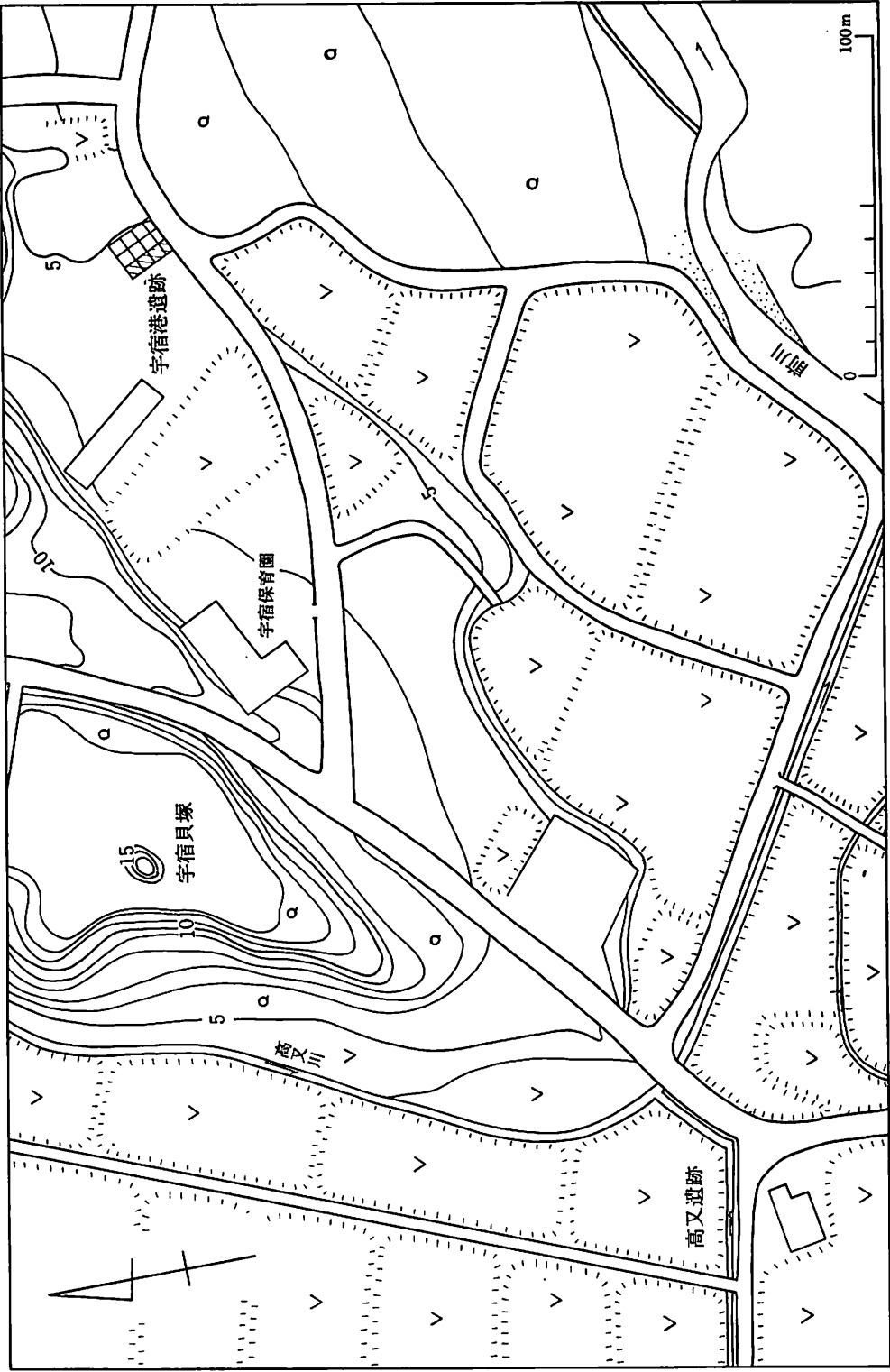
註8. 熊本大学法文学部考古学研究室 「高又遺跡」 1978

註9. 三宅宗悦 「南島の旅」 「ドルメン」 第10号 1935

二 調査の概要

1. 調査の経過 [第3図]

昭和55年3月、大阪経済法科大学の瀬川芳則氏と中山清美が町営住宅整備工事の際に人骨を発見した(1号人骨)。頭骨は原位置を離れていたが、それ以外の部位はほぼ完全な状態であり、しかも弥生相当期の可能性が強く、その資料的価値を重視した中山によって応急の、しかし入念な保存処置がとられた。奄美では先史埋葬人骨の発見例が少なく、その性格を明確にすることの重要性について熊大考古学研究室と笠利



第2図 宇宿港遺跡地形実測図

町教育委員会の間で意見が一致し、人骨の調査については九州大学医学部永井昌文教授に指導をお願いすることにした。調査は三者の協力のもとに昭和55年7月12日～23日に実施された。

発掘は4×4mを単位とし、工事による攪乱の比較的少なかったE-1～E-4グリッドに限定した。遺物は表土以下の各層で出土しているが、弥生時代後期の土器を伴うIV層からの出土量が最も多く、E-1～E-4グリッドIV層での遺物出土状況を実測し、E-2グリッドでIV層のブロックサンプリングを行なった（第3図）。

1号土壌では応急の保存施設を撤去し、1号人骨を原位置で精査の後、採取した。次いで2号土壌が検出され、その下半部で原位置を保った人骨を検出・採取した。

（中山・西住）

2. 層序 [第4図；図版Ⅲ]

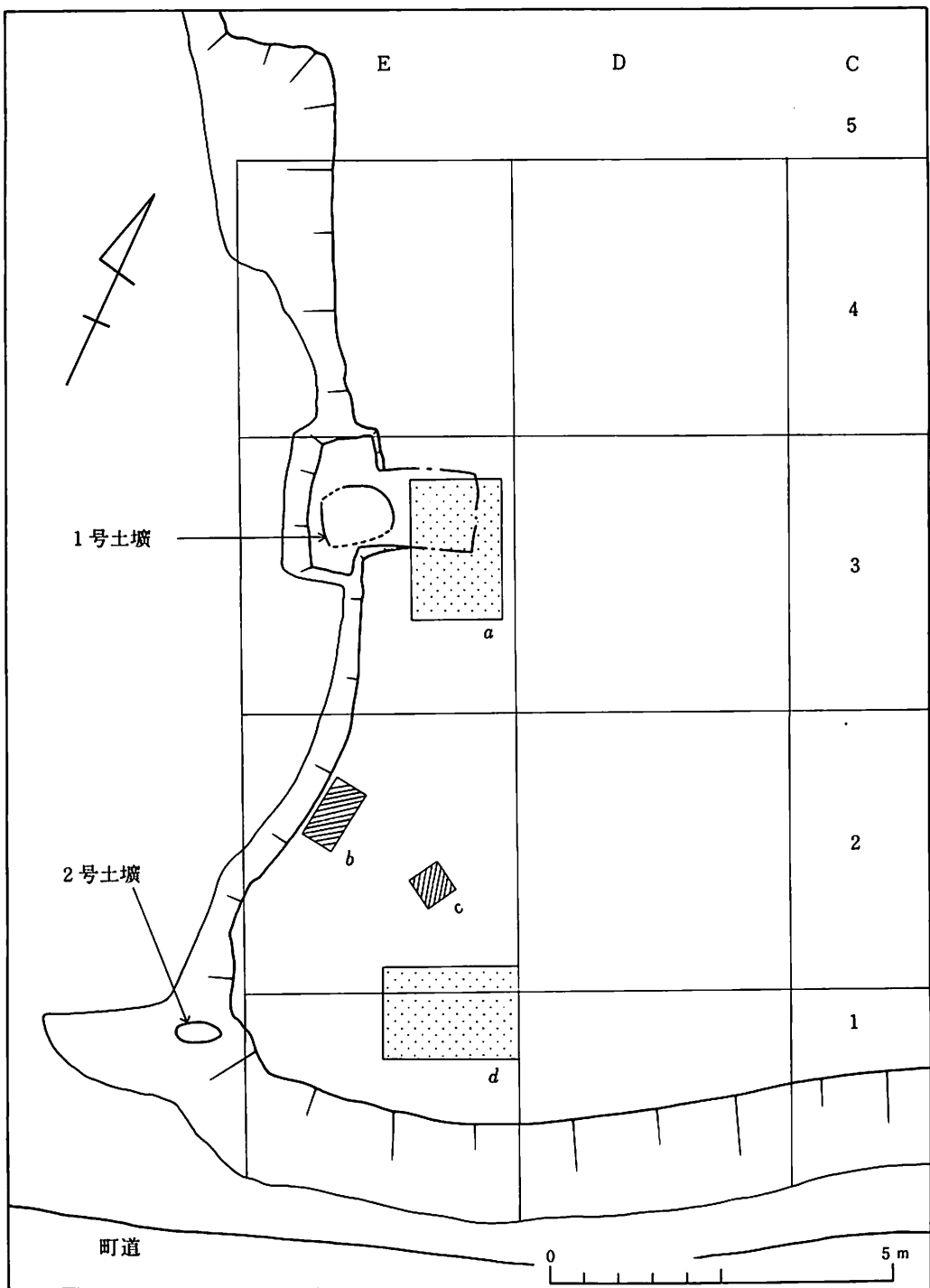
I・II層は攪乱土層である。全発掘区にわたってブロック状の土塊が混入しておりビニール袋・空カンなどが出土する。ただし、出土する先史遺物には多少のかたよりがあり、I層からは弥生時代相当期の土器片・磁器・石器・貝刃・貝などが出土し、II層からはその他にいわゆる兼久式土器の小片・獣骨・魚骨などを出土する。

III層は黒色を呈する土層である。厚さ5～10cm。E-1グリッド東壁からE-3グリッド西壁にかけて観察される。E-4グリッドでは攪乱のため曖昧であるが、本来はE-3グリッドからここへのびていたものと推察される。出土土器に弥生時代後期相当の資料が含まれている。

IV層は淡褐色を呈する砂層である。厚さ5～20cm。E-3グリッド東壁付近、E-4グリッド北側部分で、層が見られない箇所がある。砂の粒子は細かく、中にサンゴの小破片などを含んでいる。弥生時代後期相当の移入土器片も少量出土する。

V層はVa層～Vc層の三つに分けられる。V層上部は淡黄色を呈する砂層であるが、砂の粒子が細かい厚さ20～50cmのVa層と砂の粒子がやや粗い厚さ約240cmのVb層とに分けられる。V層上部からは、弥生時代中期の甕形土器片が検出されている。Vc層はE-3グリッドを一部掘り下げて確認した青灰白色砂層である。厚さ約40cm。無遺物層である。最下部では、サンゴの岩盤があり、その上部で湧水が見られる。

（西住）



第3図 宇宿港遺跡平面図

a・d 遺物分布図位置 b・c ブロックサンプリング地点

3. 遺物の出土状況 [第5・6図; 図版Ⅳ・Ⅴ]

発掘した範囲で、Ⅰ層・Ⅱ層は攪乱層であるため、ここではⅢ～Ⅴ層における遺物の出土状況について述べる。

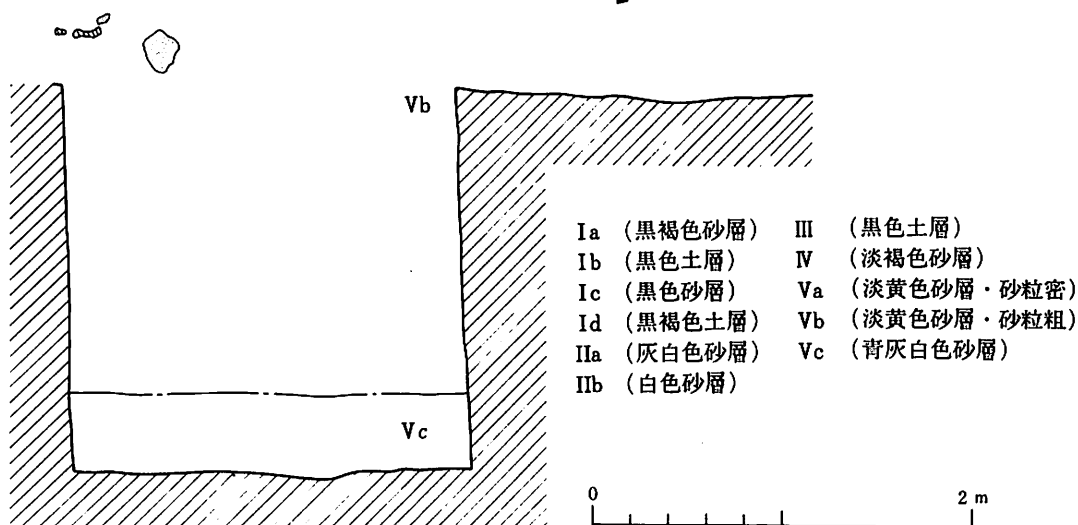
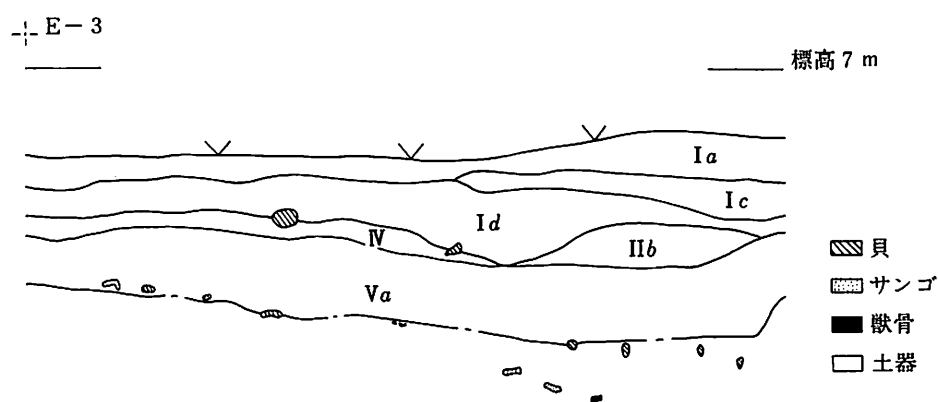
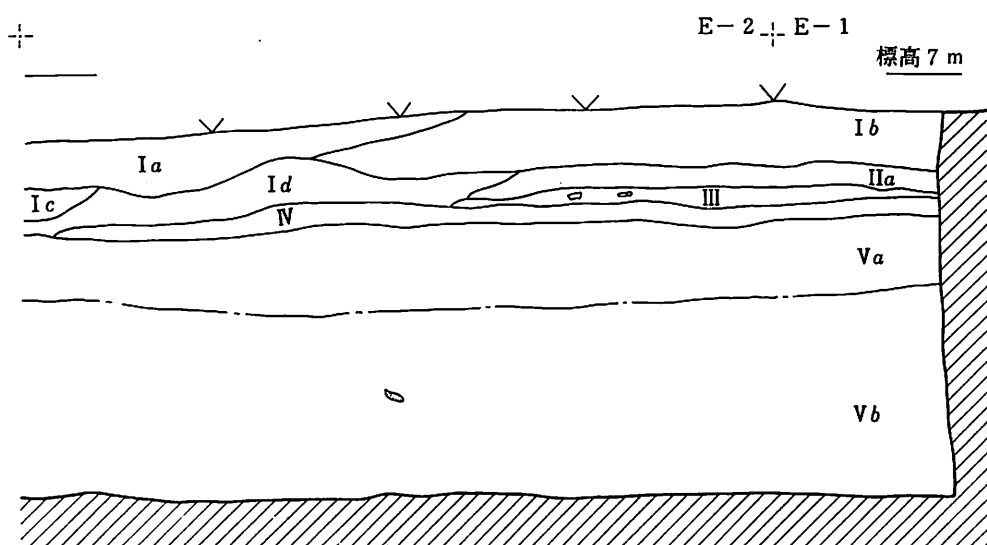
Ⅲ層からは小土器片・貝刃・貝・獣骨・魚骨などがまばらに出土している。しかし、ウスカワマイマイが集中している部分が数箇所ある。マガキガイ・シラクモガイなどの小型の貝が多く見られ、大型の貝は数点しか出土していない。Ⅲ層全体の遺物出土量はⅣ層・Ⅴ層と比べて少ない。

Ⅳ層から最も多くの遺物を出土した。土器では甕形土器片が多く、少量の壺形・鉢形土器片もある。壺形土器は移入されたものであろう。この他、磨石・ヤコウガイのフタを利用したいわゆる貝刃・ヤコウガイの貝製品・貝・獣骨・魚骨などが出土している。これらの遺物はⅣ層の下部で検出されたものが殆んどである。しかし遺物の集中度は均一ではなく、E-1・E-2グリッドでは略全面に遺物があるが、E-3グリッドでは一部に遺物が集中しているだけであった。また遺物が集中する箇所では土器の出土量よりも貝の出土量が多く、穿孔貝や焼けた貝を含んでいる。貝は2～3個重なった状態で出土しているものもある。魚骨はブダイ科・フエフキダイ科・ベラ科などの骨が出土している(第5図; 図版Ⅳ下)。

1号土壌の東側で、E-3グリッド東壁から西側へ50～100cmの箇所では貝匙未製品の集中が見られる。内側の光沢ある部分を上にした状態で出土しているものが多い(図版Ⅳ上)。

Ⅴ層ではⅤa・Ⅴb両層から遺物が出土しているが、Ⅴb層上部から出土したものが殆んどである。Ⅴb層上部、1号土壌の東側周辺一部で遺物の集中が見られるが、Ⅳ層下部ほどではない(第6図; 図版Ⅴ下)。この箇所では少量の甕形土器片・ゴホウラ製の腕輪(図版Ⅴ上)・獣骨・魚骨・サンゴ・ヤコウガイのフタなどが見られる。甕形土器は移入品であると思われる。

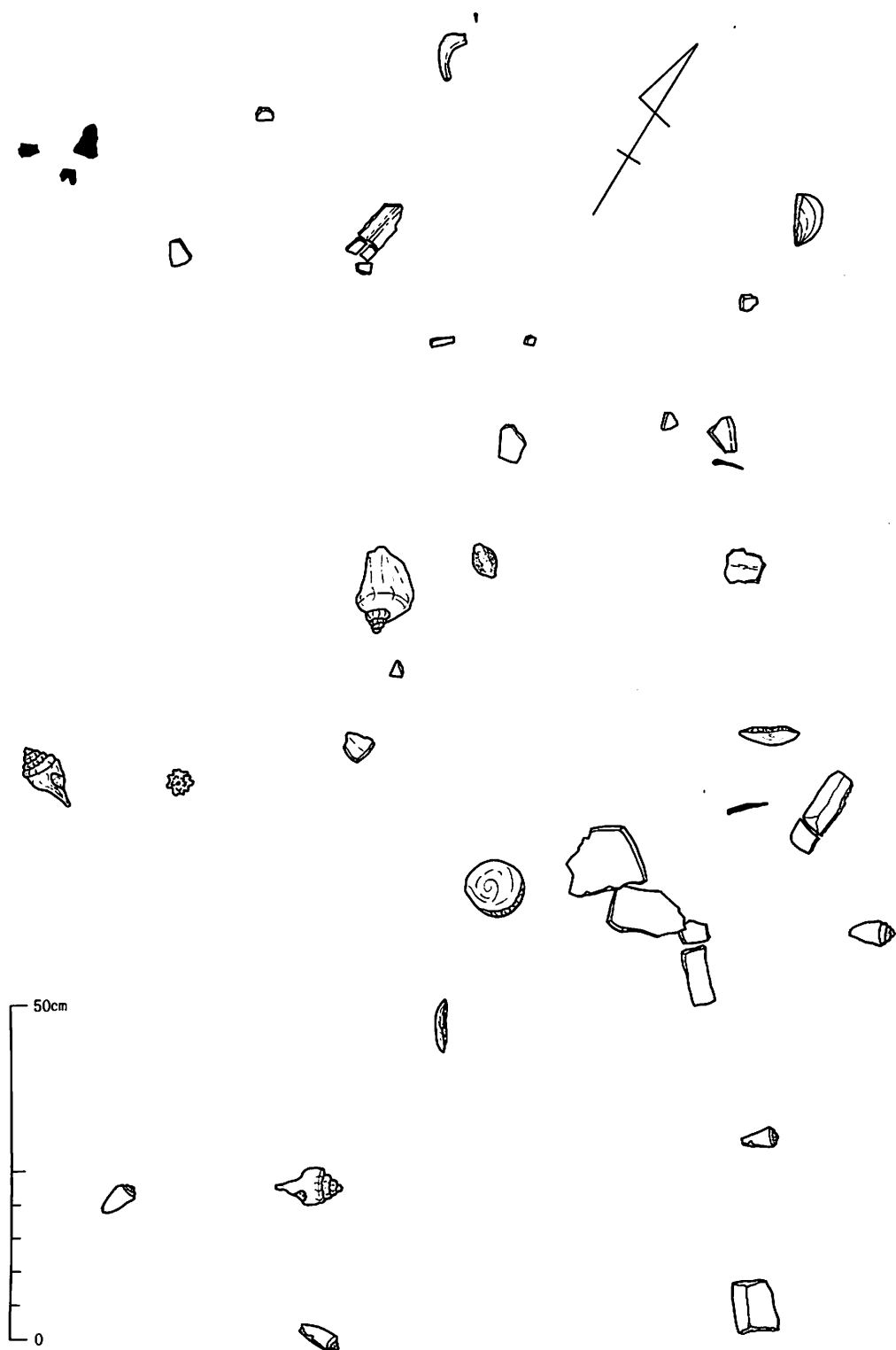
(西住)



第4図 地層断面図



第5図 遺物分布図(1) (第IV層) (第3図d地点・黒塗りは魚骨)



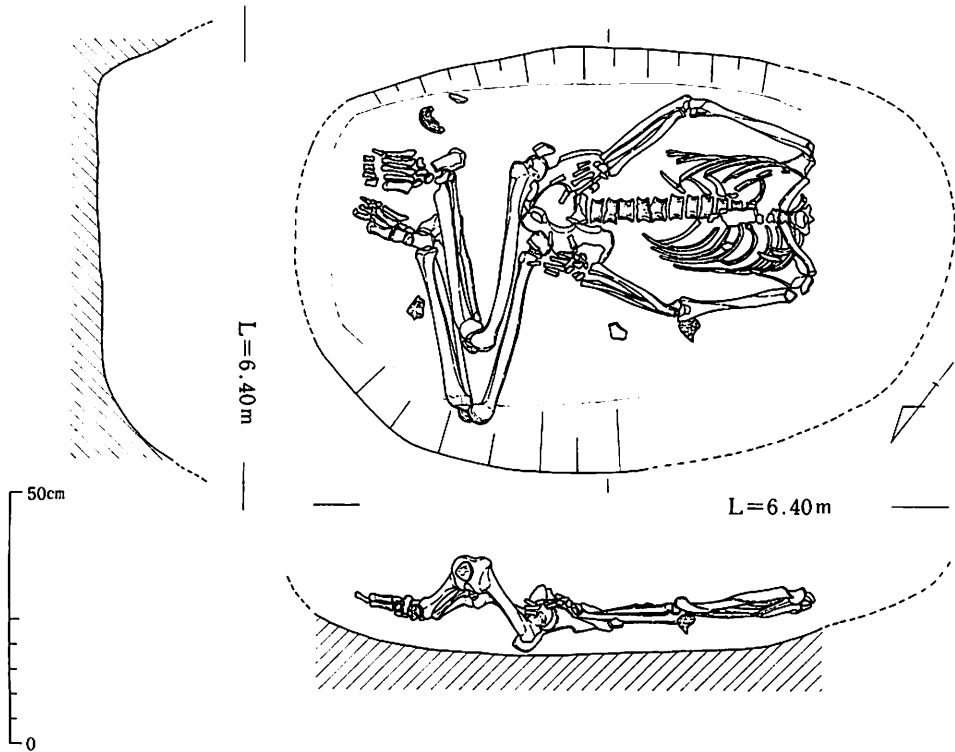
第 6 図 遺物分布図(2) (第 V 層) (第 3 図 a 地点・黒塗りは魚骨)

三 遺 構

1. 土墳墓〔第7図；図版Ⅵ下・Ⅶ左〕

宇宿港遺跡からは、土墳墓2基が検出されており、人骨も出土しているが、下記のように、頭位も埋葬姿勢も大きく異っている。

1号土墳墓は、E-3グリッドに位置し、未攪乱部分の墓壇ラインからみて、長楕円形の平面プランをなしていたものと推定される。墓壇は、Ⅲ層をへてⅣ層に達しているが、攪乱のために、どの層から掘り込んだのかは明らかでない。したがって、土墳墓の年代は、Ⅲ層以降、すなわち弥生時代後期相当期以降といわなければならないが、Ⅲ層自体が削平されており、加えて墓壇内の砂がⅢ層のそれと酷似していることなどから、弥生後期に相当する時期か、もしくはそれをさほど下らない時期であると考えて大過ないだろう。



第7図 1号土墳墓実測図

人骨は、工事の際に頭部が原位置から動かされてしまったが、南西に頭位をとり、回内させた手を骨盤上に置いて、強く屈した下肢を左側へと倒した仰臥位で葬られている。そして、人骨の左右足首付近と左肘関節部には貝が認められた。右足首のものは二枚貝片、他の二者は巻貝である。また、手首・足首は、それぞれ20cmほど離れていることから、緊縛はされていなかったようである。副葬品はない。

2号土壊墓は、E-1グリッドに所在し、工事によって砂が削り取られた南西の崖面に接して検出された。わずか70cm×30cmほどの範囲に人骨を含んだ暗灰色の砂がみられただけであるが、墓壊内の砂質が均一で二次堆積特有の混じりがなく、また人骨の相対的位置関係も崩れていないことから、プライマリーなものと判断した。墓壊底はV層中に及んでおり、レベルからみて、IV層から掘り込んだものと考えなければならぬ。

人骨は、胸椎・肋骨・尺骨・橈骨等が墓壊内に認められ、右尺骨が若干動いている以外は、ほぼ相対的な位置関係を保っている。また、E-1グリッド区南西部の土壊墓に近い崖面から骨盤・大腿骨・腰椎・足根骨等下半身の骨が採集されており、南東の崖面からは、墓壊内にあって原位置を保っていたと思われる上腕骨が採集されている。しかし、墓壊周辺の精査にもかかわらず、頭部とその付近の骨は1片たりとも検出されていない。このことは、墓壊内の人骨の位置関係から頭位が南東と推定されることから、2号土壊墓の破壊が、頭側（南東）からと下半身側（南西）の2方向からなされ、前者の破壊による土砂は人骨とともに運び去られたことが考えられるのである。その場合の埋葬姿勢は、前腕の骨がいずれも同じ高さでカットされ、逆に上腕骨は近位を、さらに大腿骨も遠位をカットされていることから、上下肢とも強く屈した仰臥屈葬であったとの推定が可能である。なお、人骨の右肘関節近くに巻貝が1個みられた。

(田中)

四 出土遺物

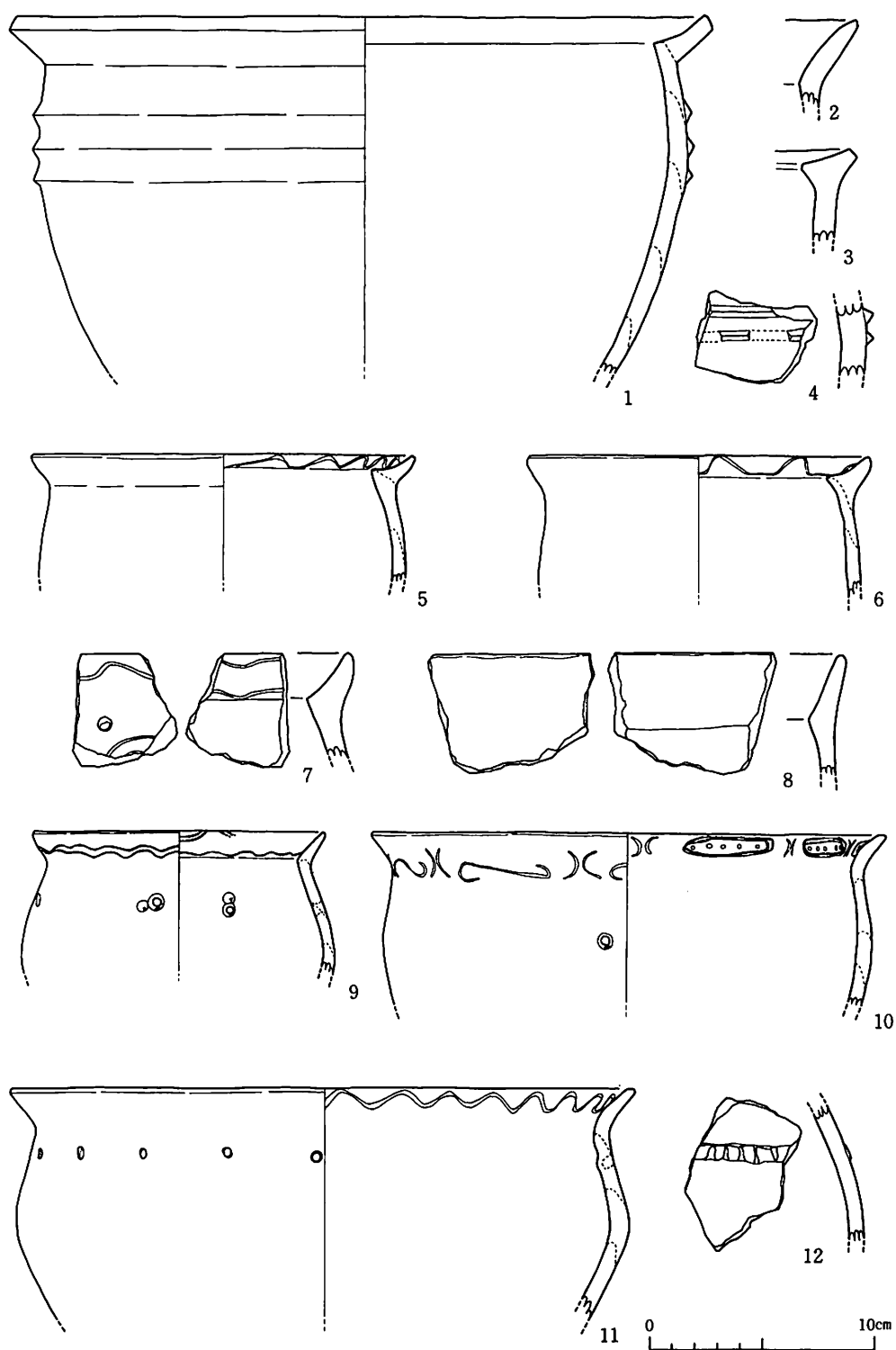
1. 土器・陶磁器 [第1表]

〈土器〉 [第8図・第9図13~23; 図版IX・X上]

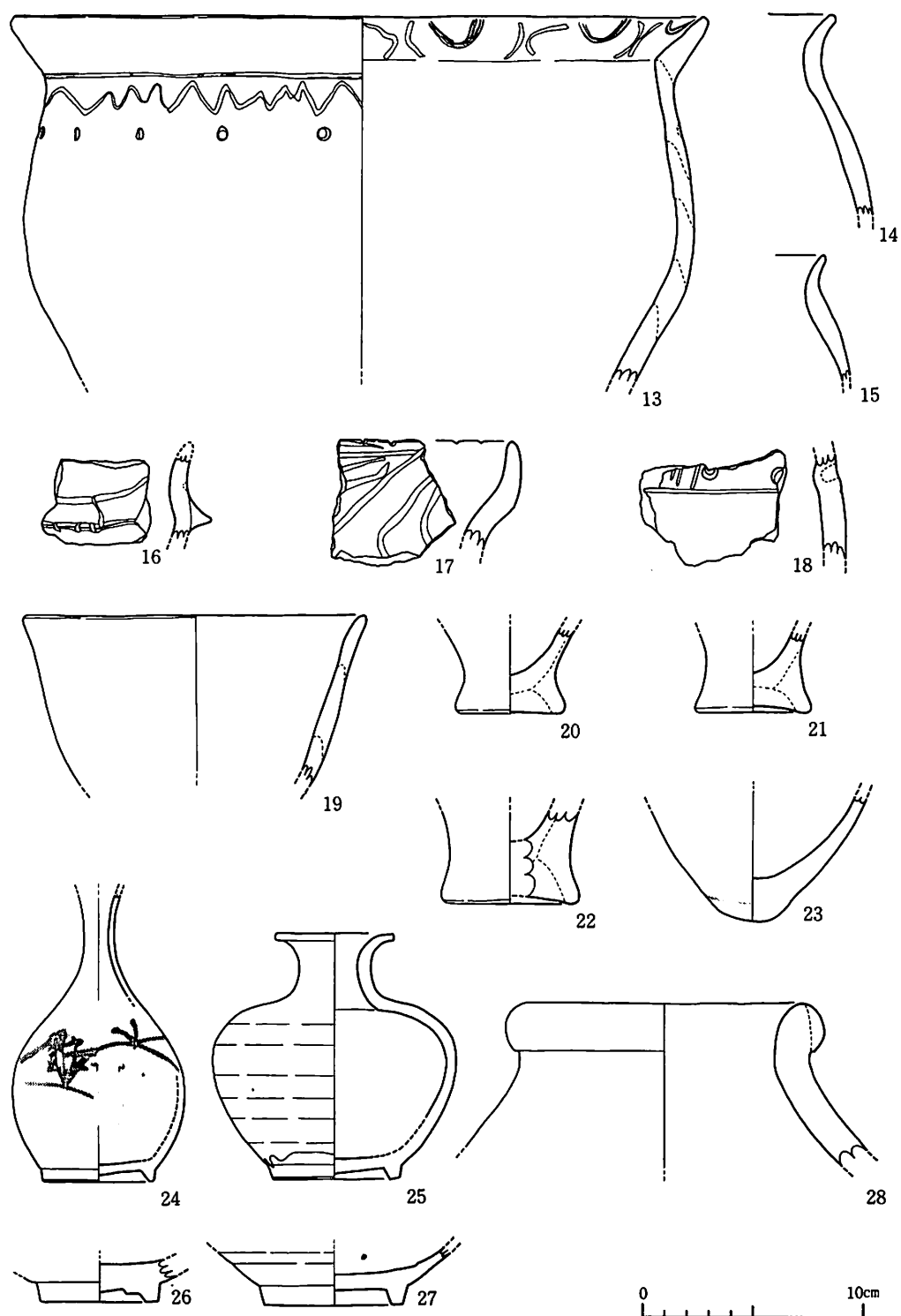
土器の総量は整理箱に約三箱ほどであった。攪乱層のⅡ層以上を除いて、その量は

第1表 出土土器一覧表

図 番	番 号	出 土 位 置	器 種	胎 土	焼 成	色 調		文 様 及 び 器 面 調 整		備 考
						内 面	外 面	内 面	外 面	
8	1	E-3V	甕	緻密 金雲母 砂粒を 含む	良好	暗赤褐色	灰褐色	横方向のハケ目	横方向のハケ目	外面上部スス付着 断面三角形の凸帯三本 貼付
	2	E-2V	甕	緻密	やや 甘い	灰橙色	灰褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	
	3	E-4 表上	甕	細砂粒 を多く 含む	良好	鮮赤褐色	鮮赤褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	二本の断面三角形の凸 帯を持つ
	4	E-2IV	甕	細砂粒 を多く 含む	良好	褐色	赤褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	
	5	E-2IV 下部	甕	緻密	良好	灰赤褐色	灰赤褐色	口縁内部に浅い曲線文 ヨコナデ	ヨコナデ	
	6	E-2IV	甕	砂粒を 含む	良好	褐色	暗褐色	口縁内部に浅い曲線文 ヨコナデ	ヨコナデ	
	7	E-2II	甕	砂粒を 多く含 む	良好	赤褐色	赤褐色	口縁部に二条の曲線文 ヨコナデ	曲線間に刺突孔あり ヨコナデ	スス付着 胴部に補修孔あり
	8	E-2IV	甕	緻密	甘い	黄褐色	灰赤褐色	タテ・ヨコナデ	タテ・ヨコナデ	
	9	E-2IV	甕	サンゴ 粒を含 む	良好	鮮赤褐色	赤褐色	波状沈線文と二条のU 字文 ヨコナデ	波状沈線文を2列に施 す 胴部はタテの条痕 他はヨコナデ	
	10	E-2IV E-1V	甕	砂粒を 含む	良好	灰赤褐色	暗褐色	X字文と二重の長楕円 の中に刺突を施したも のを交互に施す ヨコナデ	X字文との字文を交互 に施す沈線、ナデ、ハケ	胴部に補修孔あり
	11	E-2II	甕	細砂粒 を含む	良好	赤褐色	赤褐色	波状沈線文 ヨコナデ	頸部に刺突文 ヨコナデ	
	12	E-2IV	壺	緻密	やや 甘い	灰褐色	灰褐色			一部スス付着 刻目突帯を持つ底部23 と同一図体
9	13	E-1IV	甕	緻密	良好	暗赤褐色	赤褐色	X字文と二重のU字文を 交互に施す ヨコナデ	単直線文とその下に波 状文、刺突文 ヨコナデ	外面に一部スス付着
	14	E-2IV	甕	緻密	良好	暗赤褐色	暗赤褐色	タテ、ヨコナデ	ヨコナデ	
	15	E-2IV	甕	緻密	甘い	灰褐色	灰褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	
	16	E-2II	甕(頸部)	砂粒を 含む	良好	灰褐色	赤褐色	ヨコナデ	刻目凸帯・凸帯上部に 沈線による曲線文	
	17	E-2IV	甕	砂粒を 多く含 む	良好	灰褐色	暗赤褐色	ヨコナデ	浅い沈線による曲線文 ナデ	口唇部刻目
	18	E-4IV	?	砂粒を 含む	良好	赤褐色	褐色	ヨコ方向のヘラ	浅い沈線による直線文 の組合せ ナデ	口縁付近スス付着
	19	E-2IV	鉢	緻密	甘い	灰赤褐色	灰赤褐色	荒いナデ	条痕	
	20	E-1 表土	甕	石英砂 粒を含 む	良好	暗赤褐色	暗赤褐色	ナデ	ナデ	アゲ底
	21	E-1II	甕	砂粒を 含む	良好	暗赤褐色	暗赤褐色	ナデ	ナデ	
	22	E-1IV	甕	砂粒含 む	良好	暗赤褐色	暗赤褐色	ナデ	ナデ	アゲ底
	23	E-2IV	壺	石英砂 粒含む	やや 甘い	灰色	灰赤褐色			
	24	E-1II	小型瓶	緻密	良好	明緑灰色	明緑灰色		染付	丸底に近い尖底 風化 激しい、底部スス付着 全面施釉、伊万里焼 外面底部付近露胎 黒釉、薩摩焼 内面に施釉 福産産灰白磁 福産産灰白磁 琉球甕
	25	E-1II	小型壺	緻密	良好	黒色	黒色			
	26	E-2I	高台付碗	緻密	良好	灰白色	白色			
	27	E-2I	高台付碗	緻密	良好	灰白色	灰白色			
	28	E-2 表土	甕	緻密砂 粒を含 む	良好	褐色	褐色			



第8图 土器実測図



第9図 土器・陶磁器実測図

2. 石器〔第10図1～6・第11図1；図版X下〕

石器としては、使用痕乃至加工痕のあるもの8点が出土した。1はE-1グリッドⅡ層出土で、中央・両端及び側縁に敲打痕を残す。3はE-3グリッドⅤ層出土で、両端部に研磨の痕がある。4はE-2グリッドⅣ層の出土で、欠損が著しいが、研磨は全面に及んでいたようである。5はE-1グリッドⅡ層から出土したもので、半ば近くを欠損しており、図の下端にかけて敲打痕が著しい。6はE-4グリッドⅠ層から出土した。形状が石匙状を呈する用途不明の石器である。三箇所にかぎりを入れ、つまみ状の突起部を作り出している。この種の石器は砂丘遺跡から時折出土をみる。その他周辺の畑から磨石2点が採集されている。また、中山清美によって本遺跡から表採された磨製石鏃がある。スレート製で、基部を欠失している。完形は二等辺三角形を呈するようである（第11図1）。本島における磨製石鏃は、サウチ遺跡・宇宿貝塚で発見されている。（辻）

3. 貝製品

〈貝刃〉〔第10図7～12；図版XI上〕

ヤコウ貝の蓋の縁がほぼ半周ほど内側に向かって打ち欠かれたもの—いわゆる貝刃が破片を含めて108点出土した。内訳は、攪乱層から81点、Ⅲ層から2点、Ⅳ層から20点、Ⅴ層から5点である。

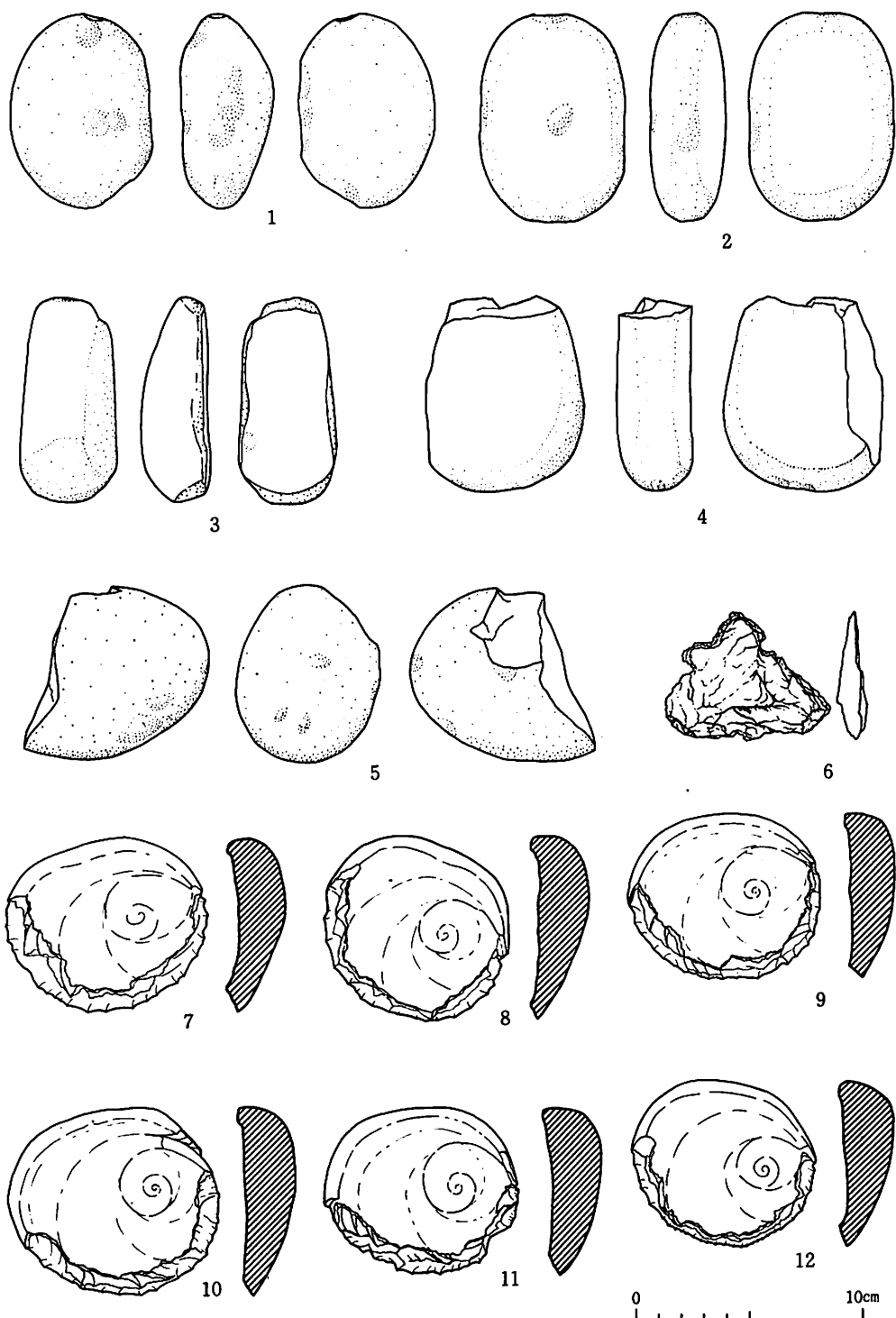
第10図の標品は、9がⅣ層から、他は攪乱層から出土したものである。貝刃の破片には刃先を下にした状態で、横方向に割れたものが多い。刃先に磨滅した痕跡のみられるものもある。

いわゆる貝刃は、南島に広く分布しており、極めて多くの遺跡で発見されている。

（村岡）

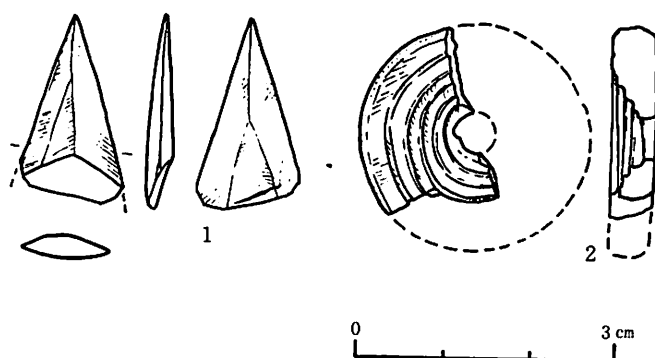
〈貝製垂飾品〉〔第11図2〕

E-3グリッドのⅣ層からイモガイ製垂飾品の残欠1点が出土した。イモガイの螺頭先端部を横割りして中央部を穿孔したもので、外面は平坦に、側縁には丸味を持たせ、内側の縫合部の渦巻状の突帯は横に研磨してその稜をつぶしてある。



第10図 石器・貝刃実測図

このような貝製垂飾品は鹿児島県鳥ヶ峯遺跡・広田遺跡・サウチ遺跡・沖縄県具志原貝塚・アカジャンカー貝塚など、弥生中期～後期に相当する遺跡からの出土例が目立っている。（永目）



第11図 磨製石鉞・貝製垂飾品

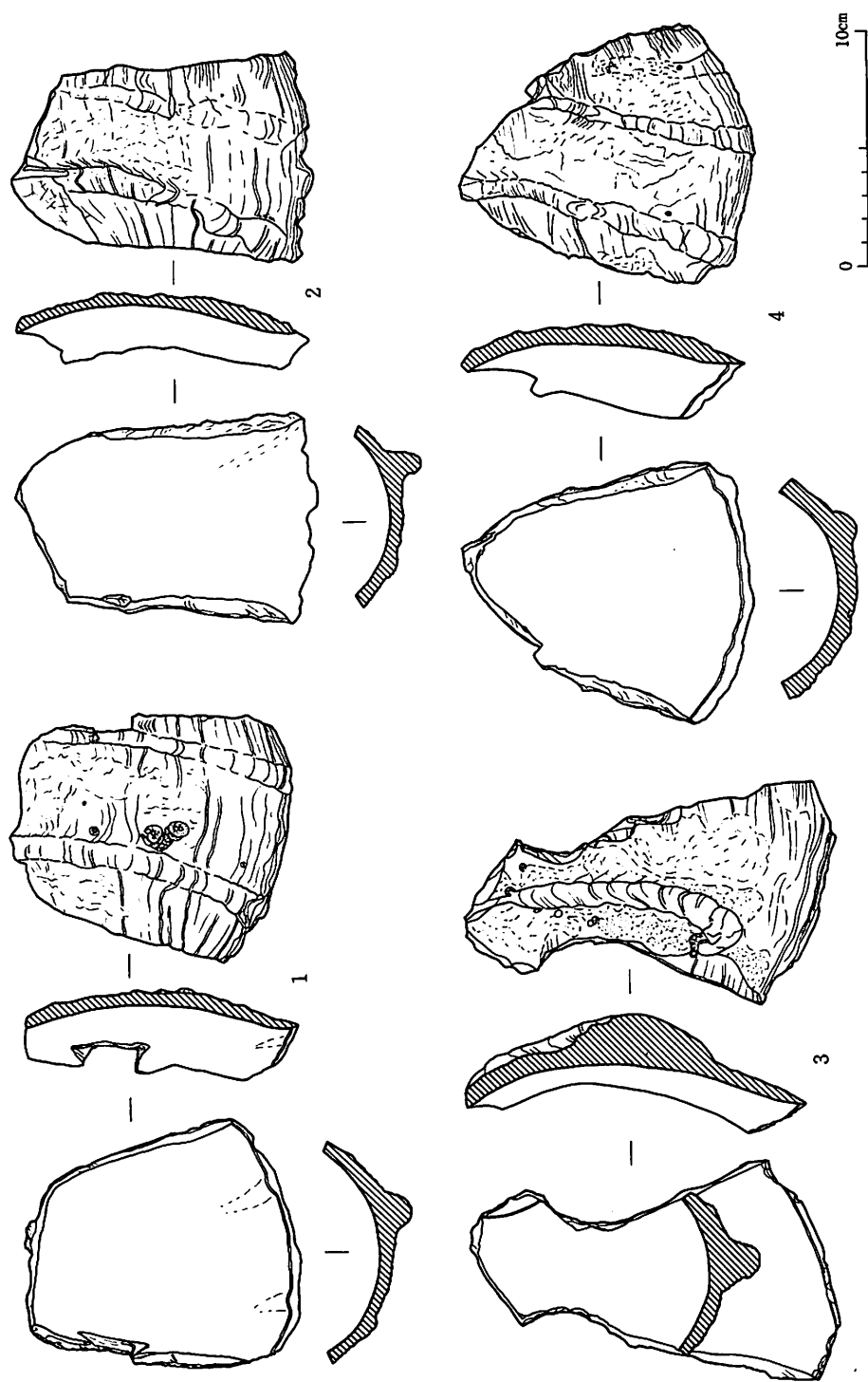
〈貝匙未製品〉〔第12図；図版Ⅳ上・Ⅺ上〕

ヤコウガイ製の貝匙の未製品と思われるものが出土している。E-3グリッドのⅣ層下部東壁近くから、大型のものが4点、小型のものが数点、それらを切り取った残りと思われるヤコウガイ数片が、同一平面上にひとかたまりとなった状態で出土した（図版Ⅳ上）。未製品の多くは内面が上を向いた状態であった。全てヤコウガイの体層部を切り取って使用しており、特に大型のものは4点とも貝の外唇部が未製品の先端になるよう利用されている。全体に荒けずりで、大型品のひとつは左右にえぐりを入れて把手状に成形してある（第12図3）。一般に貝匙と呼ばれるものは結節部を取り除いてあり、また外唇部側を把手にするのが普通であるが、本遺跡出土のものは結節部が残されたままで、把手の取り方が逆であるため内面の湾曲が浅い。このような未製品の類例は本遺跡近くの笠利町土盛遺跡からも採集されている。（永目）

〈貝輪〉〔第13図；図版ⅩⅢ〕

E-3区、第Ⅴ層出土。

全体に入念な加工を施す。表側表面に貝本来のゆるやかな起伏を残すが、ほぼ全面にわたって研磨面を認める。内側周縁部は縁に沿っていくつかの細い研磨面が帯状に走り、殊になめらかである。裏面に残る縫合の痕跡、貝の厚さ、形態からみて、ゴホウラを素材とした可能性が強い。また、内側周縁部から水管溝側に向って、外側表面に三角形の研磨面をつくり出す点や、縫合部研磨の状態、全体のカーブの具合は、他のゴホウラ製貝輪のそれと一致する。したがって、当破片は本来円環形をなし、形態加工の特徴からみて腕輪として用いられていた可能性が強い。



第12図 貝匙未製品実測図

ゴホウラの背面を用い、広田型貝輪に属する。類例として、奄美大島宇宿高又遺跡採集品、徳之島喜念原始墓出土品、伊是名島伊是名貝塚出土品、沖縄本島隅原貝塚採集品等がある。これらはいずれも環帯の幅が1～2cm内におさまるもので、広田型貝輪の典型である広田遺跡上層に多い貝輪より、同下層のものにより近似する。(木下)

参考文献

熊本大学法文学部考古学
研究室 『高又遺跡』

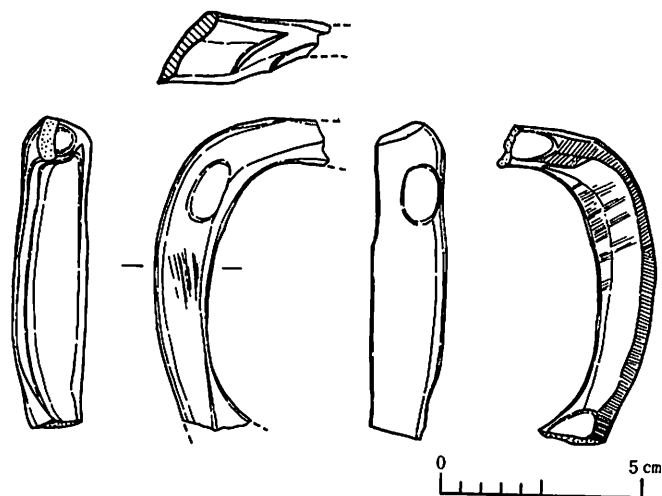
研究活動報告3 1978

三宅宗悦 「大隅国徳之
島喜念原始墓
出土貝製品及
び出土人骨の
抜歯について」
『考古学雑誌』
第10巻33号
1943

伊是名村教育委員会

『伊是名貝塚』

1979



第13図 貝輪実測図

五 自然遺物

1. 貝 [第14図; 第2表; 図版X下・XI]

本遺跡では、Ⅱ層より上は攪乱層、Ⅲ層はその分布範囲が狭いため、ここで取り扱う貝はⅣ層・Ⅴ層のものに限った。今回出土した貝は、25科55種に及び、それらは以下のとおりである。

【軟体動物門】

〈腹足綱〉	ツタノハガイ科	マツバガイ	<i>Cellana nigrolineata</i>
	ユキノカサガイ科	ウノアシガイ	<i>Patelloida saccharina</i>
	ニシキウズガイ科	イシダタミガイ	<i>Monodonta libio</i>
		ダルマサラサバテイ	<i>Tectus niloticus</i>
		ベニシリダカ	<i>Tectus conus</i>
	リュウテンサザエ科	チョウセンサザエ	<i>Marmarostoma agryrostoma</i>
		ヤコウガイ	<i>Lunatica marmorata</i>
	アマオブネガイ科	アマオブネガイ	<i>Theliostyla albicilla</i>

	イシダミアマオブネガイ	<i>Ritena helicinoides</i>
	リュウキュウアマガイ	<i>Amphinerita insculpta</i>
ヤマタニシ科	ヤマタニシ	<i>Cyclophorus herklotsi</i>
タマキビガイ科	タマキビガイ	<i>Littorina brevicula</i>
トゲカワニナ科	トウガタカワニナ	<i>Thaira scabra</i>
ゴマフニナ科	ゴマフニナ	<i>Planaxis sculcatus</i>
ウミニナ科	イトカケヘナタリ	<i>Cerithidea rhizophorarum morchii</i>
	ウミニナ	<i>Batillaria multiformis</i>
	ホソウミニナ	<i>Batillaria cumingii</i>
オニノツノガイ科	オニノツノガイ	<i>Cerithium nodulosum</i>
スイショウガイ科	マガキガイ	<i>Conomurex luhuanus</i>
	オハグロガイ	<i>Canarium urceus</i>
	イボソデガイ	<i>Lentigomus lentiginosus</i>
	ゴホウラ	<i>Tricornis latissimus</i>
	スイジガイ	<i>Harpago chiragra</i>
	クモガイ	<i>Lambis lambis</i>
タカラガイ科	ハナビラタカラガイ	<i>Monetaria annulus</i>
	ハチジョウダカラガイ	<i>Peribolus mauritiana</i>
	ヤクジマダカラガイ	<i>Peribolus arabica</i>
	ヒメヤクジマダカラガイ	<i>Peribolus depressa</i>
フジツガイ科	ホラガイ	<i>Charonia tritonis</i>
オキニシ科	シロミオキニシ	<i>Bursa bufonia</i>
ヤツシロガイ科	ウズラガイ	<i>Tonna perdx</i>
アクキガイ科	ツノテツレイシ	<i>Purpura hippocaastanum</i>
	シラクモガイ	<i>Purpura armigera</i>
	ガンゼキボラ	<i>Chicoreus brunneus</i>
	イボニシ	<i>Thais clavigera</i>
イトマキボラ科	ナガイトマキボラ	<i>Pleuroploca filamentosa</i>
	イトマキボラ	<i>Pleuroploca trapezium</i>
	リュウキュウツノマタガイ	<i>Latirus polygonus</i>
オニコブシガイ科	オニコブシガイ	<i>Vasum ceramicus</i>
イモガイ科	ゴマフイモ	<i>Puncticulus pulicarius</i>
	アンボンクロザメガイ	<i>Lithoconus litterratus</i>
	イボカバイモ	<i>Virgiconus distans</i>
	ミカドミナシガイ	<i>Rhombus imperialis</i>
オナジマイマイ科	ウマカワマイマイ	<i>Acusta despecta</i>
(斧足綱) マルスダレガイ科	ヌノメガイ	<i>Periglypta puerpera</i>
	アラヌノメ	<i>Periglypta reticulata</i>
	チョウセンハマグリ	<i>Meretrix lamarchi</i>
	オキシジミ	<i>Cyclina sinensis</i>
	アサリ	<i>Tapes phillippinarum</i>
	ホソスジイナミガイ	<i>Gafrarium tumidum</i>

シャコガイ科	シラナミガイ	<i>Tridacna maxima</i>
	ヒレジャコガイ	<i>Tridacna squamosa</i>
	ヒメジャコガイ	<i>Tridacna crocea</i>
イソハマグリ科	イソハマグリ	<i>Atactodea striata</i>
シオサザナミガイ科	リュウキュウマスオ	<i>Asaphis dichotoma</i>

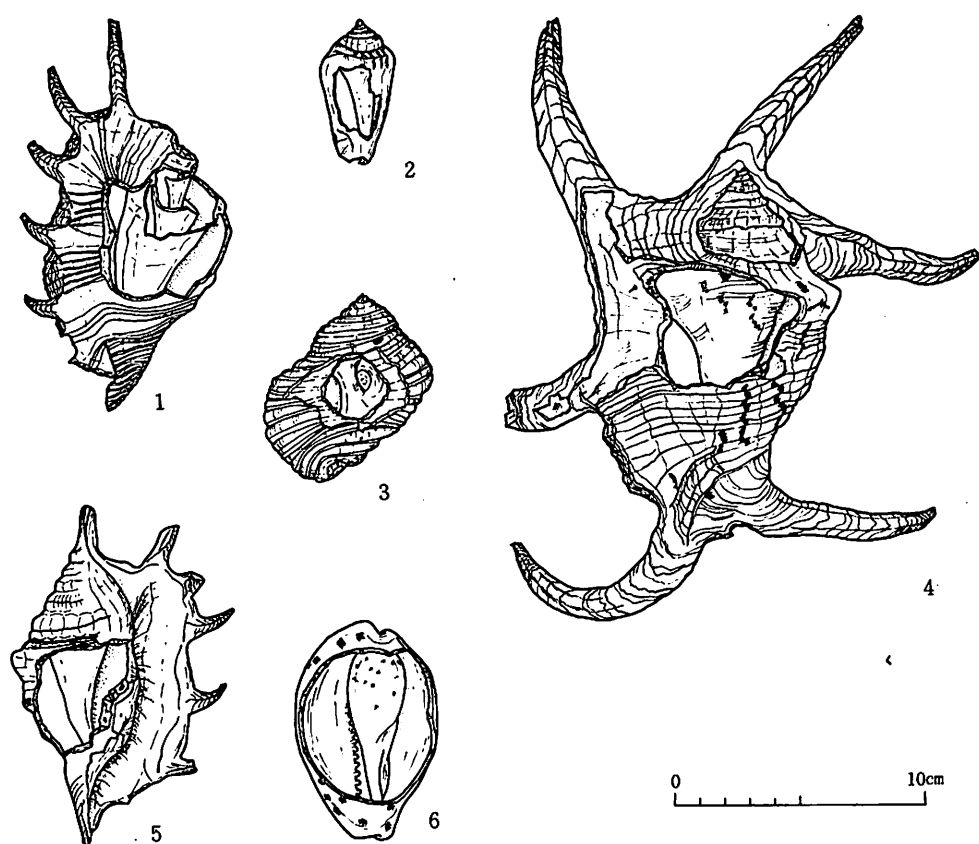
貝は、発掘区全般にわたって分布するが、特にE-1・E-2グリッドの東壁付近に集中しており（第5図）、E-4グリッドではまばらであった。全体の傾向を知るために、E-2グリッドIV層で50×100×16.5cmと50×50×20cmのブロックサンプリングを行なった（第3図・第2表）。火を受けたものもあるがそのほとんどは巻貝である。ちなみに、発掘区内では砂の焼けた痕跡は認められていない。

種 名	個 体 数	%	種 名	個 体 数	%
マ ガ キ ガ イ	95 (3)	20.48	ヤ コ ウ ガ イ	5 (1)	1.08
イ ソ ハ マ グ リ	84 (3)	18.10	イ ボ カ バ イ モ	5 (0)	1.08
シ ラ ク モ ガ イ	60 (6)	12.93	ヒ メ ジ ャ コ ガ イ	5 (0)	1.08
ア マ オ ブ ネ ガ イ	37 (1)	7.98	ゴ マ フ ニ ナ	4 (0)	0.86
ヤ マ タ ニ シ	20 (0)	4.31	ハ ナ ビ ラ ダ カ ラ ガ イ	4 (0)	0.86
ミ カ ド ミ ナ シ	19 (6)	4.10	イ シ グ タ ミ ガ イ	3 (0)	0.65
オ ニ ノ ツ ノ ガ イ	17 (2)	3.66	ア サ リ	3 (0)	0.65
イ シ ダ タ ミ ア マ オ ブ ネ ガ イ	16 (0)	3.45	ダ ル マ サ ラ サ バ テ イ	2 (0)	0.43
ク モ ガ イ	14 (0)	3.02	イ モ ガ イ 科	2 (0)	0.43
シ ロ ミ オ キ ニ シ	12 (1)	2.59	ア ラ ヌ ノ メ	2 (0)	0.43
シ ラ ナ ミ ガ イ	12 (1)	2.59	リュウキュウアマガイ	1 (0)	0.21
タ マ キ ビ ガ イ	9 (0)	1.94	ス イ ジ ガ イ	1 (0)	0.21
ベ ニ シ リ ダ カ	8 (0)	1.72	ヒメヤクジマダカラガイ	1 (0)	0.21
イ ト マ キ ボ ラ	8 (0)	1.72	ハチジョウダカラガイ	1 (0)	0.21
チ ョ ウ セ ン サ ザ エ	7 (3)	1.51	計	464 (27)	100.00
ツ ノ テ ツ レ イ シ	7 (0)	1.51			

（註）2枚貝は左殻と右殻の数の多い方をとった。

個体数の横の（ ）内の数字は焼けたものの個体数である。

第2表 E-2グリッドIV層ブロックサンプリング貝出土量



第14図 穿孔貝実測図

巻貝では、体層・次体層に孔を穿った例が多種にわたりみられる。穿孔の大きさ・部位はまちまちで、一定の傾向は認められない。中でも、マガキガイ・スイジガイなどの美味な肉をもつスイショウガイ科のものが特に多く、穿孔は肉を取り出すための破損痕と思われる。マガキガイ・シラクモガイなど小さな貝には、ごく少数であるが焼けたものも見られた。

第14図は中でも特徴的なものである。1・5はクモガイで1は背面、5は腹面を打ち欠いたものである。2はマガキガイ、3はチョウセンサザエ、4はスイジガイである。スイジガイもクモガイも、管状棘に加工痕は認められない。6はハチジョウダカラガイを打ち欠いたものである。穿孔が大きいため、錘に使用された可能性もあろう。(古荘)

1. 魚骨〔第3・4表〕

第Ⅳ層出土魚骨については、発掘時その全てを4mmメッシュで乾燥フルイにかけて採取した。更に82,500cm³のブロックサンプルを持ち帰り2mmメッシュをかけた。第Ⅴ層での出土は粗で、出土付近のみ4mmメッシュでふるった。出土魚骨のほとんどは4mmメッシュに残る大きさだが、ウニ棘部の脱落が目立った。結果を第3・4表に示す。

出土地区・層	科名	前上顎骨		歯 骨		主上顎骨		上咽頭骨		下咽頭骨	間接骨		主鰓蓋骨		最大 個体数
		右	左	右	左	右	左	右	左		右	左	右	左	
Ⅰ～Ⅲ層	スズキ目														
	ハタ科(?)		2		2										2
	タイ科・クロダイ属	2													2
	フエフキダイ科			1	1										1
	ベラ科									1					1
E 1 Ⅳ層	ブダイ科	2			1				1	1					2
	スズキ目														
	ハタ科(?)			1											1
	タイ科・クロダイ属	1													1
	ベラ科							1	1						1
E 2 Ⅳ層	ブダイ科		3							1					3
	スズキ目														
	ハタ科(?)	1	3		1	1						2			3
	タイ科・クロダイ属		1	1	1										1
	フエフキダイ科	4	3	1	1										4
E 3 Ⅳ層	ベラ科	4	2	3	1			2	2	1					4
	ブダイ科	3	6	6	5		1	1		5			1		6
	フグ目														
	カワハギの類			1											1
	ハリセンボン科					1									1
E 4 Ⅳ層	スズキ目														
	ベラ科		1												1
	ブダイ科		1												1
Ⅴ層	スズキ目														
	ハタ科(?)	1		1											1
	タイ科・クロダイ属		1			1									1
	ベラ科									1					1
	ブダイ科	1	1	1				1	1				1		1
ブロックサン プル	スズキ目														
	フエフキダイ科				1										1
	ベラ科	1			1			1							1
	ブダイ科									2					2 計46

第3表 魚骨集計表（未同定の魚骨を除く）

魚骨は各部位にわたり、一定のまとまりをもって出土する。同一個体の頭部骨がややまとまって出土する状況も認められた（第5図）。各科とも複数種の魚類を含み、これら以外に同定できなかった数種類がある。焼痕を留める例が少数認められる。他にウニの棘部、間歩帯、カニの指節が検出された。（木下）

科名	個体数・%
スズキ目	
ハタ科	8 17.39
タイ科・クロダイ属	5 10.87
フエフキダイ科	6 13.04
ベラ科	9 19.57
ブダイ科	16 34.78
フグ目	
カワハギの類	1 2.17
ハリセンボン科	1 2.17
合 計	46 99.99

第4表 科別出土個体総数・構成比

3. 動物遺存体〔第5・6表; 図版XIV〕

本遺跡からは、下記の通り、2綱6種の動物遺存体が確認されている。プライマリな遺物包含層である第Ⅲ・Ⅳ層および第Ⅴ層から検出されているのは、ウミガメとリュウキュウイノシシのみである。また、採集標本 953g に対して、この二者は、それぞれ 270g、228g を占めている。

さて、種名が査定されたものは次のとおりである。

爬虫綱 Class REPTILIA

○ウミガメ科の一種 *Cheloniidae* *gen.et sp.indet.*

哺乳綱 Class MAMMALIA

○リュウキュウイノシシ *Sus riukiuanus* KURODA

○ウシ *Bos taurus*

○ヤギ *Capra hircus*

○ウマ *Equus caballus*

○イヌ *Canis familiaris*

以下、個別に述べてゆきたい。

○ウミガメ

第5表に示したように、検出部位に偏りがあり、腕の骨と甲板骨のみが検出されている。推定最少個体数は、四肢骨からみると、Ⅲ層は甲板骨の小片1点のみであることから、混入であると考えれば、Ⅳ層とⅤ層に各1個体ということになる。このことは、E-2グリッドⅣ層出土の左上腕骨近位部が九大所蔵標本（アカウミガメ）よりも大きく、E-2グリッドⅤ層出土の右尺骨遠位部が同標本より小さいことや、E-2グリッドを中心に検出された甲板骨の厚さが80mm前後、E-1・E-2グリッドを中心に分布するⅤ層のものが40mm前後の値を示すことなどからもうかがえる。したがって、本遺跡のウミガメは、Ⅳ層ではE-2グリッドを中心として大型のものが1個体、Ⅴ層においてはE-1・E-2グリッドを中心に小型のものが1個体、それぞれ分布していたことになろう。

日本近海に分布するウミガメには、アオウミガメ・タイマイ・アカウミガメの3種があるが、これらは洋上においても捕獲が容易であり、産卵時に上陸した際にはさら

に容易である。本遺跡のウミガメもこのようにして捕獲されたのであろうが、検出部位が全身に及んでいないことから、海岸などでいったん分解処理されたものが搬入されたことが想定されよう。なお、E-2グリッドIV層出土の甲板骨小片は火を受けており、同様の破片がE-3グリッドからも採集されている。

○リュウキュウイノシシ

IV層・V層ともに各区にまたがって出土しており、ほぼ全身の骨が検出されている。第6表に示したとおり、推定最少個体数は、IV層で2個体、V層で1個体である。これらは、E-1グリッドIV層出土の下顎 ($M_3 M_2 + P_4 P_3$ ---+++++ | ++++++ - $P_2 P_3$ ++ $M_2 M_3$, +は歯牙の欠失した歯槽。この個体には $P_2 P_1$ | P_1 が萌出していない) の計測値に示されるように、いずれも小型のイノシシであり、奄美以南に分布するリュウキュウイノシシとしてよいだろう。

	M_3	M_2	(M_1)	P_4	P_3
下顎骨体高	27.1	28.9	28.9	30.4	30.1
下顎骨体厚	19.8	18.8	16.6	15.3	14.6
歯 冠 長	24.3	15.6	—	11.0	9.8
歯 冠 幅	12.2	10.6	—	6.7	5.4
下顎歯列長	122.7				

イノシシ下顎骨 (E-1グリッドIV層) 計測値 (単位mm)

年齢的には、前記の下顎が、第3後臼歯 (M_3) の萌出を完成させており、かつ咬頭の磨耗がそれほど進行していないことから3才6ヶ月程度の成獣と推定され、E-2グリッドIV層とE-3グリッドV層出土の左下顎犬歯 (\sqrt{C}) は双方ともかなり成長したものと考えられるが、V層出土の左脛骨 (E-4)・右尺骨 (E-1) は、いずれも骨端の癒合が不完全で遊離していることから、若獣と推定される。

性別は、上記の左下顎犬歯2点が雄獣のものと認められるが、E-1グリッドV層出土の下顎骨は犬歯歯槽の形状からみて雌獣と推定される。

これらの多くは破損しているが、下顎骨・脛骨・尺骨などはほぼ完形に近い。また前記のようにほぼ全身の骨がみられることから、遺体の解体・処理は遺跡内で行なわ

出土層・区	部位	頭骨	頸骨	肩甲骨		上腕骨		尺骨		桡骨		寛骨		大腿骨		脛骨		腓骨		指骨	甲板骨
		r	l	r	l	r	l	r	l	r	l	r	l	r	l	r	l	骨			
表 採																				1	
攪	D 2																				1
	E 1																				11 (肋骨板 1)
	E 2																				2
	E 3																				2 (肋骨板 1)
乱	E 4																				2
	小計																			1	18
Ⅲ 層																					1
Ⅳ 層	E 1																				1
	E 2					1 [*]													1		14 (肋骨板 2)
	E 3																				4
	E 4																				2
	小計					1													1		21
Ⅴ 層	E 1																				5
	E 2							1 ⁺													3 (肋骨板)
	E 3																				2
	E 4																				2
	小計							1													12
合 計						1	1													2	51

第5表 ウミガメ検出部位

出土層・区	部位	頭骨	脊椎	肩甲骨		上腕骨		桡骨		尺骨		寛骨		大腿骨		脛骨		距骨		踵骨		中手・中足骨	
				r	ℓ	r	ℓ	r	ℓ	r	ℓ	r	ℓ	r	ℓ	r	ℓ	r	ℓ	r	ℓ	r	ℓ
M-7区6 (表採)				1																			
第Ⅳ層	E 1 下顎						1											1				McⅢ	
	E 2 1(C)			1																			
	E 3												1									phV	
	E 4							1	1														
	小計	2		1				1	1	1				1					1			2	
第Ⅴ層	E 1									1													
	E 2			1				1															
	E 3 1(C)																						
	E 4																						
	小計	1		1				1		1									1				
合 計		3		3				2	1	2				1				1		1			2

第6表 イノシシ検出部位

れたことが想定される。ちなみに表面に齧歯類による咬傷をもつものも多い。

○ウシ

E-2 グリッドから中足骨、E-1 グリッドから中手骨が検出されている。いずれも骨体部の小片であり、攪乱層の出土である。ほかにも、左橈骨と思われる破片がE-1 グリッドの攪乱層から出土しているが、これら3点の牛骨は、包含層出土骨と保存状態に差があり、きわめて新しい時期に属するものと考えられる。

○ヤギ

E-1 グリッドから右肩甲骨、E-2 グリッドから左寛骨が出土しており、肩甲骨は攪乱層の出土であるが、寛骨はIV層の出土となっている。しかし、この寛骨には攪乱層特有の黒色土が全体に付着しており、やはり攪乱層出土のものとするべきであろう。保存状態はきわめて良く、ウシ同様後世のものとした方が無難であろう。

○ウマ

E グリッド攪乱層から左肩甲骨が出土している。保存状態・色調ともに牛骨に酷似し、後世のものであろう。

○イヌ

E-2 グリッド攪乱層から左上腕骨近位部が出土している。これも、保存状態・色調からみて、新しい時期のものと考えられる。

以上のように、宇宿港遺跡からは2綱6種の動物遺存体が確認されているが、弥生時代に属することが確実なものはウミガメとリュウキュウイノシシの2者のみである。この結果は、過去の宇宿遺跡群の調査結果と同様であり、この2者が食料源として大きな比重を占めていたことを再確認した形となったようである。

本報告にあたっては、九州大学医学部解剖学教室標本を参考にし、永井昌文教授の指導を受けた。また、九州大学文学部考古学研究室木村幾多郎助手、同理学部大学院修士課程（生態学）仲谷淳、同医学部解剖学第2講座那須哲夫・土肥直美の諸氏には関係文献をはじめとして多くの御教示を賜った。末筆ながら記して謝意を表したい。なお、図版写真は那須哲夫氏によるものである。（田中）

参考文献

- 四手井綱英・川村俊茂編著『追われる「けもの」たち』1976
内田要 他『新日本動物図鑑（下）』1965
内田享 他『動物系統分類学10（下）』1963
今泉吉典 「琉球列島産イノシシの分類学的考察」『国立科博専報』6, 1973
林良博 他「日本産イノシシの歯牙による年令と性の判定」Jap. J. vet. Sci, 39, 1977
九学会連合奄美大島共同調査委員会編『奄美—自然と文化—』1959
林田重幸 「奄美大島群島貝塚出土の猪と犬について」『人類学雑誌』78—2, 1960
大塚関一他「獣骨」『鹿児島考古』13, 1979

六 宇宿港遺跡出土の人骨について

九州大学解剖学教室 永 井 昌 文

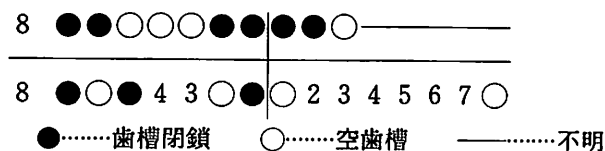
第1号人骨 男性、成年

この遺跡調査の端緒となった人骨で、昭和55年3月、町営住宅建設のための採砂整地中、その頭部が露出した。そこで同月22・23の両日、奄美考古学研究会員等は笠利町教育委員会と連絡をとりつつ緊急試掘を行ない、既に採取した頭・頸部以外の全身骨の原埋葬位を確認した後、保存処理を施して埋め戻し、同年7月の本調査を待った。

出土状態：本調査における設定グリッドE-3区の第Ⅲ層からの掘込みと推定される土壌中より出土した。埋葬姿勢は仰臥屈葬、頭位は南52°西で両肘はゆるく曲げ手骨は骨盤上にあり、下肢は強く曲げて左横膝にそろっている。埋葬当初の肢位が問題であるがおそらく、木棺などを使用して立膝であったものがその後倒れたものではなく、股・膝・足の各関節に乱れが殆んど無く、左足骨はむしろ底面を上に行っていることなどから、最初からこのような姿勢で葬られたもののように思う。墓壇の膝部における拡がりもこれを裏づけている。

保存状態：全身骨がほぼ揃っており、骨質も比較的良好である。ただ発見時の事情で頭骨はその右半に大きな欠失部があり、顔面骨も所々に小片を欠く。その他、足指の中・末節骨がほとんど無いが、これは3月の緊急発掘時に失われたものであろう。

残存する顎骨の歯式は下記の通りである。



墓壇内砂の pH は 9.01 (H₂O)、8.57 (KCl)〔中橋・未発表〕で骨の保存のためには非常に良好な砂質と思われるが、海綿質に富む骨端では皮質が剝落した箇所が多い。

推定年齢：歯牙の咬耗度はMartin 氏の1度ないし2度であり、恥骨結合面の加齢状況はTodd 氏のⅣ期（30～35才）の様相を呈するので成年とした。

推定性別：頭骨および骨盤骨の性徴よりして、男性であることは疑を容れない。

推定身長： 159.1cm

左大腿骨最大長 (414mm) より Pearson 氏の式で推定した身長は上記の如くである。

頭形示數：78.1 中頭形

抜歯風習の痕跡：上顎切歯4本の歯槽がすべて閉鎖しており、下顎左の側切歯および犬歯の切縁が近遠心方向に斜に磨耗しているので、あるいは上顎左側の切歯に偏側性の風習的抜歯が存在したのではないかと疑が持たれるが、全歯列に齲蝕が多数見られるので、この点は定かではない。

特記事項：この人骨には右下腿に胫腓合併骨折後の変形治癒痕が見られる。すなわち胫骨骨折で普通に見られる中・下々境界部よりはやや下に、斜の骨折面が後上方から前下方に向い、両端にあたる骨間縁と内果上方に假骨の異常増殖を見る。腓骨の骨折面は、胫骨のそののほぼ延長上にあつて骨体中央部に近く高位にあるが、方向を異にし鋭く斜に前上方より後下方に向う。骨折部の屈曲転位は著しくなく、両下腿骨は左側のそれに較べ約2 cmの短縮を来たしている。

第2号人骨 女性、成年

この人骨は3月の予備調査以前に大半を撓乱された後、7月の本調査の際、その残部が原埋葬の位置に発見されたと思われるものである。本調査時、自然の配置で出土したのは下位胸椎とそれに接合する肋骨ならびに腰椎でE-1グリッド西端の第IV層からである。他の諸骨は断片として3月の予備調査で数片、7月の本調査でさらに数

片、附近から採取されている。全体としては一体分を構成し、同一個体と思われるが、下肢の主要長骨と頭骨などは得られていない。骨量は不完全であるが、骨質は良好である。

脊椎骨や諸関節に老年性の変化が見られないことから、成年ないしは熟年初期と思われる。また、幸い残った寛骨片の特徴（大坐骨切痕の開きなど）や四肢骨がやや細小であることなどから女性と見てよいであろう。

今回の調査で得られたのは上記の2遺体であるが、そのうち資料として他の地域出土人骨との比較に堪えるのは第1号人骨のみである。比較的完全な弥生時代男性人骨の出土はこの地域では初めてであるので、今回は紙面の都合上、計測成績を割愛したが、今後の貴重な南島人の資料として保存したい。

なお、埋葬遺跡としては、集団埋葬墓的な性格が稀薄であることも注目して行きたい。

七 まとめ

往時宇宿の低地一帯は小さいながら巾着形に口の締った湾を形成していた。この湾は、云わば砂丘の中の大きな水溜りのような状況で、極く浅く、所々に洲が頭を出しており、西南方向から水量の多い前川が、西北方向から細いが水勢のやや強い高又川が流れ込み、前者の南岸と後者の北岸が即ち湾の縁であった。宇宿港遺跡はこの北岸の砂丘に形成された遺跡であり、遺構としては人骨を納めた土壌があるだけで、各層位にわたって土器・石器が散在するが、あまり密ではなく、全体として小集落の縁辺部のような様相を呈していた。

宇宿の一帯からは弥生文化の波及を示す資料の発見があいついでいる。土器に例をとると在来の土着系の土器、弥生の土器の型を踏んだものと思われる土器、薩南方面の弥生土器そのもの、の三者が混在する。宇宿港遺跡においても同様で、出土の土器は形式的には弥生の中・後期の型に依っており、しかも全体の土器に対する比率の高さには注目すべきものがある。最近この種の土器を出土した遺跡としては、宇宿の諸地点と、サウチ遺跡・手広遺跡などがあるが、今のところ笠半島に集中した観がある。宇宿上層期の遺物の再検討を急ぐ必要があるし、九州乃至薩南の弥生文化との関連の具体相、即ち伝播か変容かと言ったような問題、またそれを可能ならしめた在地

の文化の主体的な条件などにつき、判断資料の増加をはからねばならない。

調査の云わば眼目であった人骨2体はそれぞれ違った層に属する土壌に埋葬されたもので、1体は弥生後期に相当する時期のもの（2号人骨）、他の1体は弥生後期に相当する時期か若しくはそれをさほど下らない時期のものである（1号人骨）。墳は壊がひどく、例えば置石等の施設の有無はわからなかった。

1号人骨は成年男性のものと推定され、南西に頭を置いた仰臥位で、下肢は屈げられているが緊縛されていなかったと推定された。また右下腿に骨折の痕があり、抜歯痕の可能性のある歯槽閉鎖がみとめられた。2号人骨はその大部分が原位置を動かされていたか若しくは失なわれていたが、成年女性と推定され、南東に頭を置き、上下肢ともに強く屈した仰臥葬であつたろうとされた。両者とも副葬品は見当らぬが、手足の関節に貝や螺を添わせた形痕のあることは、南西諸島から裏日本にかけて類似の例があり、注意を要する。なお、港遺跡の埋葬は、セメトリーに依るものではなさそうである。三宅宗悦氏の「南島の旅」に、付近から人骨の出ることが述べられているが、保育園や市営住宅地の地均しの様子では、この付近が人骨の密集地であつたとは考えにくい。近在の広田遺跡や鳥ヶ峰埋葬址ではセメトリーが形成されていたにもかかわらず、略同時期のものと推定される宇宿人骨・馬毛島人骨・港人骨にその様相が見当らず、個々に埋葬される傾向の認められることは、先述の弥生文化の伝播などの問題を考える際に考慮を払わねばならない点であろう。

いわゆる貝刃、ヤコウ貝製の匙の半製品、火を受けた大形の貝・ウミガメなどは、特にこの地点を目ざして捨てられたものではなく、この地点とその近傍で営まれた日常生活によって散乱したものである。特にイノシシはこの地点で解体された可能性が強いとされている。このあたりは集落の縁辺部であつたのであろうし、その位置と遺物出土の状況は、馬毛島埋葬址でも見られたように、死者と生者の隔絶がそれほど厳しいものではなかったことを物語っている。

なお、貝類では礁原に棲むものが目立ち、魚類はベラ・ブダイなどの浅海・砂洲に多い魚種と、カワハギ・クロダイなど、好んで内湾に入り、半鹹水域に出入するものが中心をなしている。フエフキダイ・ハタなども礁原とその付近で捕獲されたとみてよいようである。奄美全域に見られる遺跡と内湾性地形、遺跡と礁原の対応関係は、当時の生業の程度に由来すると見てよいのであろう。

（白木原）